

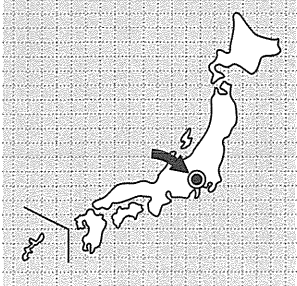
シリーズ
子どもが育つ
場所から

一人ひとりを大切に する保育



元町幼稚園（神奈川県横浜市）

時代の流れや社会状況の変化を受け、戸惑いながらも、その時々生きる子どもたちの「今」を見つめ、常に子ども主体の保育を追求し、実践してきた元町幼稚園。保護者と連携し、楽しみながら保育をしているこの園の、今の暮らしぶりをお届けします。



今号のレポーター
お茶の水女子大学附属幼稚園
佐藤（文責）、伊集院、石川、灰谷の4人で訪問しました。降りしきる雨の中、気持ちよく受け入れてくださった元町幼稚園に感謝の気持ちでいっぱいです。

元町幼稚園を訪ねて

秋のある日、神奈川県横浜市にある元町幼稚園を訪ねた。JR根岸線石川町駅で下車し、おしゃれな元町商店街の中心部を右に曲がる、汐汲坂という急な坂がある。

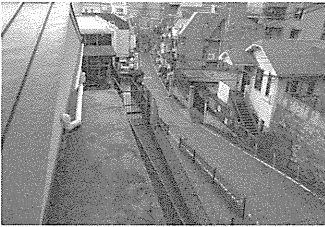
その日はあいにくの雨。坂道に行く私たちの前には、傘を差した男児が、おばあちゃんの手をつなぎながら歩いていった。

「今日は、雨だから外では遊べないかなあ」「お部屋でも楽しいことあるのじゃない？」

幼稚園までの道のり

をのんびり歩きながら、今日一日何をしようかと思いを巡らせている様子が伝わってきた。

これから始まる元町幼稚園の子どもの時間、どんなドラマが待ち受



▲汐汲坂

けているのか、ドキドキしながら後を歩いた。坂の中腹まで行くと、「おはようございます」とさわやかな声が聞こえ、副園長の加藤先生が笑顔で私たちを迎えてくださった。

保育を見つめ直してきた歴史

元町幼稚園は、一九〇九（明治四二）年、私立横浜高等女学校の附属幼稚園として設立された。関東大震災で全校舎が焼失し、その後、中断期間があり、一九五七（昭和三二）年に地元の人々の要請で再開した、歴史ある幼稚園である。注目すべきなのは、再開園から今日までの五十余年、常にその時々の子どもの姿を丁寧に見取り、自分たちの保育はこれでよいのだろうか、研修を重ねてきたその姿勢にある。

再開園から二十年を経た一九七七年、それまでの行事中心・保育者主導の保育に対して疑問を感じ始めていた保育者たちは、何気な

があり、未入园児の保育や預かり保育の部屋として使用しているとのことだった(図1)。

慣れない私たちにはやや複雑に感じる空間だが、晴れた日には、子どもたちは、園舎の上下はもちろんのこと、坂を挟んだあつちとこつちを自由に行き交い遊んでいるようだ。

坂はまるで幼稚園の敷地内のようにだが、地域の人の通り道でもあるので、子どもたちにとっても地域の方にとっても気持ちよく安全に行き来ができるよう、卒業生の保護者が交代で見守っている。

その日も雨の中、レインコートを着た親子が、坂の途中で足を止め、両側の園舎から聞こえる子どもたちの声に耳を澄ませ、「お兄ちゃんたち、遊んでるね」と話しながら歩く姿が見られた。

一人ひとりを大切にした保育

降り止みそうもない雨の中、登園してきた

子どもたちは、それぞれの保育室に向かい、身支度を済ませると、思い思いに遊び始めた。

最初に訪れた年中組では、三階の二クラス分のスペースをオープンにし、製作、お店屋さん、ままごと、粘土、ブロック、積み木、線路遊びと、空間を分けて、子どもたちが好きな遊びをしていた。

皆が生き生きと動いている中で、大型積み木で作った乗り物の中に入り込んで出てこない男児がいた。

表情もやや硬い。担任の保育者が様子を気にしながら声を掛け、他の子どもと一緒に、新聞で作ったハンドルやシートベルトを持ってきては男児に見せ、さりげ



▲年中組保育室

なくハンドルを置いて、その場を離れた。

少しして男児は、中から手を伸ばしハンドルを手にとると、それを持ったまま、声を掛けてきた保育者とその周りにいる子どもたちの様子を目で追いつつ始めた。そして、乗り物の中から自分で出てくると、保育者にトイレに行きたいことを伝えた。

トイレを済ませ、はみ出したシャツを保育者に丁寧に整えてもらっている時の男児の表情は、先程までとは全く違い、穏やかに和らいでいて、そのまま製作コーナーに行くと、周りの子どもたちに交ざり、製作を始めた。

この男児が、転園してきたばかりで、今日初めて幼稚園を訪れたということは、後から聞いて知った。初めての空間、初めての人の中で緊張する彼の気持ちを受けとめ、無理に誘うことなく、彼のペースで自然に遊びの輪に入っていくことができるように援助する保育者の丁寧なかわりがそこにはあった。

一階の年長クラス

では、女児二人が机に大きな布を広げ、型紙を置いて線を引き、切り取り、レースやビーズをあしらいい、スカート作りをしていた。ポンドが乾くように、保育者は一つ一つハンガーに掛け、窓辺にきれいに飾る。女児たちは自分たちの作品がうれしくてたまらない様子で、参観の私たちにも「素敵でしょ！ 私が作ったの」と声を掛けてきた。

その後、向かった年少保育室では、友達とのかかわりが楽しいことに気付き始めた三歳児が、紙テープの電車に乗り込み、保育室の中をあっちへ行ったりこっちへ来たり。途中テープが切れて保育者に修理してもらうのも



▲スカート作り（年長児）

